

e-dream-s 通信

No.60 発行：2005年10月9日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

目次

1. 一青窈? 辻荘一 p.2
2. オンタリオ州教育事情；カナダ滞在記（1） 中川房代 p.3
3. テクノロジー 塚本美紀 p.6



播州の秋祭は荒々しい神輿（みこし）のぶつけ合いで知られています。（2004.10...神戸っ子）

一青窈？

辻荘一

- S： で、まあその意義とか、面白いとかいうのは一応私なりに分かったつもりですけど、一言でいうと辻先生にとって e-dream-s のキモはなんですか？
- T： お、逆襲やな（笑）。
- S： 先生、いつもこのパラグラフのキモはなんやって授業中いいいますからね。
- T： そうやね、一言でいうなら「人と会う」かな。それが全部でもないけど。
- S： 別に NPO やらなくても毎日人とはいっぱい会ってるやないですか。
- T： 先生や生徒とはな。あと君たちのご両親とか。学校関係は沢山会うけど、まあ要するに仕事からみやる？
- S： 趣味とかないんですか。先生友達が少ないんですか。
- T： 失礼な奴やな。趣味もあるし、友達もいます。少ないけど。
- S： じゃあ・・・
- T： ちゃうねんちゃうねん。要するに、趣味でも仕事でも自分の会う人間って限られてるやろ？君らから、学校関係、親戚関係以外で人と会うか？
- S： んん・・・そういえば。ないですね。
- T： そうやろ？だから自分の普段の生活では絶対会わへん人と会うわけや。
- S： なるほど。じゃあ、海外旅行沢山行ってる人とか、新聞記者とかがうらやましいですか？
- T： 新聞記者が会うのも仕事からみ。海外旅行では、そりゃいろんな人と出会うことは出会うけど別に人と知り合いになるわけやないやろ？
- S： 違いがある様な気がします。
- T： 例えばな、ECAP っちゅうプロジェクトで韓国の先生方と日韓相互理解教材を作ったっていう話しはしたな。
- S： はい、コレですね。えーと Rainbow Over The ...
- T： Strait や。海峡に架ける虹。これ作るの結構大変やったんやで。で、こういうことを韓国の先生と一緒に作るという経験をしたわけや。これはなかなか出来ない経験やで。
- S： はい。
- T： それでな、単に外国の人と「やあやあ仲良くしましょう」ちゅて会うだけやなくて一緒に苦労するとな、お互いの人となりがよく分かるわけや。
- S： ああ、あまりよく知らなかったクラスメートなんかとも文化祭で仲良くなるようなもんですか？
- T： お、うまいこと言うな。そうや。これがなかなか面白いわけや。せやけどな、まだ本当に会いたい奴とは会ってへん気がする。その辺も、まだまだやって行かなあかんと思ってる理由や。
- S： え？ちゃんとテキストも作ってはるし、ECAP も順調やっていうてはるやないですか。会いたい人に会えてるんじゃないんですか？
- T： 会った人はみんな無償で協力してくれる人やから、そりゃいい人に決まってる。実際、いい人や。そやけど、本当に ECAP の意義や e-dream-s の目標を分かってくれる人とはまだ、会ってないと思うんや。いや、もう会っているんやけど、こちらのアプローチが良うなくて、我々が分かってないだけかもしれんけどな。とにかく、

もっと面白い奴に会えんかなあ、と思ってやってるところもあるわけや。

S: 結構ロマンチックな感じですね。

T: まあ、恋愛とは違うけどな。夢やね。なにしろ e-dream-s やからな。どや、ちょっとややこしい話やったけど、キモのところは分かってくれたかな？

S: 分かりました。つまり、「もらい泣き」を歌ってる・・・

T: それは、一青窈。「人と会う」や。最後にボケんでもええ。

S: 授業中当てられて「正解いうかオモロいボケせい」ていつも言うやないですか。

T: そやな、こりゃ一本取られた。

オンタリオ州教育事情；カナダ滞在記（１）

中川房代

この夏、機会があって、3週間のカナダ研修に参加しました。

e-dream-s・ACROSSのツアーとはまた一味違った研修で、様々な体験をすることができましたので、今月号と来月号とでカナダ滞在記を書きたいと思っています。まず、今号は、オンタリオ州の教育状況について、少しお話しします。

私の勤務校のある大阪府寝屋川市は、昨年末に「英語教育特区」の認定を受け、4月から、小学校5年生から中学校3年生まで、週1時間の「国際コミュニケーション科(英語活動)」の授業が始まりました。小学校には英語教育支援人材が雇用・配置、ALTの人数も増え、中学生の英語検定受検料の一部が補助されるなど、市独自の様々な事業がスタートしています。今回私の参加したカナダ研修もその一環で、「教員の英語指導力を一層向上させるため、小中学校教員の海外研修実施してまいります。」(「市長市政運営方針¹」)として、市立の全小・中学校から各1名ずつを海外研修に派遣する計画です。今年は3年計画の1年目、12名の小・中学校教諭がこの研修に参加しました。(市の事業とはいえ、費用の半額以上は参加者の自己負担ですが。)

旅立つ前は、不安でいっぱいでした。勿論、これまでのe-dream-sやACROSSの海外ツアーの経験から、何とかなるだろうし、自分も何とかするだろうという自信もありました。が、今回のカナダ研修は、今までのツアーとは違う部分が多く、それらが私を不安にさせていました。まず、期間。今までの海外経験は最長2週間までで、今回のように3週間と

¹市長市政運営方針（平成17年3月）より

<http://www.city.neyagawa.osaka.jp/mayor/uneihoushin/index.htm>

というのは経験がない。加えて、自分たちで企画したツアーではないので、どう進んでいくのかの見通しが立たない。そして、一緒に参加するメンバーはほとんどが英語が不安な小学校の先生。どうなるんだろ…。無事に3週間の研修を終えて帰国することができるのだろうか？

7月24日(日)夜、無事にカナダに到着しました。「カナダは涼しいぞ！」と期待していたのですが、予想に反して、今年の夏は暑いのだそうで、ほとんど、最高気温は30度を越えていました。それでも湿度が低いので、そんなに高いようには感じず、緯度の関係で、夜も9時頃までは明るいです。(現地の人々は、今年はひどい蒸し暑さだと悲鳴を上げていましたが、大阪に比べたら快適そのもの！)

滞在先は、オンタリオ州ブランプトン。今回の研修先であるシェリダンカレッジ²のデービスキャンパスがあります。シェリダンカレッジは、1967年創立の学生数1万人余の州立大学で、寝屋川市と姉妹都市であるオークヴィル市にメインキャンパスがあります。トロントから南西に数十キロ、車で40分ほどのオンタリオ湖に面した落ち着いた街でした。

大学が夏休みのこの時期、私たちの研修先のデービスキャンパスでは、主にESLとLinc(リンク)の2つのコースが開講されていました。ESLのコースは主に海外からの留学生のためのクラス、Linc(リンク、ESL for immigrants and newcomers)はカナダへ移住してきた者人たちを対象にしたコースで、ほとんどの人たちが働きながら通って来ています。

私が参加したLincの5AのReadingのクラスは、15名くらいの学生がいて、その出身国は、インド、ロシア、ベラルーシ、タイ、コロンビア、ポーランド、中国、韓国、ベトナム、ブラジル、台湾、など、15カ国以上にわたっていました。先生もシンガポール人。テキストのトピックは家庭での夫婦での家事分担について。テキストの内容理解の後、テキストを少し離れて、生徒に「あなたの国では家事分担はどうですか?」「あなたの家庭ではどうですか?」という質問に生徒が答えていたのですが、それぞれのお国柄がでていておもしろかったです。先生も含め、妻が働いていても家事は妻、という国・家庭が多かったのですが、カナダに来てから、夫が家事をするようになったという生徒や、家事をしない夫への不満をいう生徒もいて、盛り上がりました。多国籍、多民族ならではの授業だなあと興味深く思いました。

オンタリオ州では(カナダ全体、移民の多い国ではどこでもそうなのかもしれませんが)immigrantsへの英語教育、彼らが働いて生活できる程度の語学力をつけるための教育を受ける権利が、政府によって保障されています。この学校に通うのも授業料は無料。Lincのレベルは1~5、或いは7まで(1がbeginner)まであって、この学校ではレベル3から5を開講しているそうです。どのくらいの期間まで受けられるのかと質問したら、レベル5Bまで、人によって違うが、だいたい1年半から2年間くらいだということでした。

無料で英語教育というのは、年間25万人の移民者を抱えるカナダならではの政策なのかもしれません。カナダは消費税が高く、GSTと呼ばれる連邦消費税が7%、オンタリオ州税

² <http://www1.sheridaninstitute.ca/>

が 8%なので、生活するのにも結構お金がかかります。その税金がこういう移民の政策にも使われているのかなあと思いました。

ブランプトン周辺はとりわけインド人が多く、聞くところによると、40%がインド人、しかもパンジャブ地方の出身の人が多そうです。街でも、サリーを着た女性や頭にターバンを巻いた男性をよく見かけました。そういえば、タクシーの運転手もインド人が多かった。行き先を言ってもなかなか発音が通じなかったなあ。

この旅は、今までのツアーとは全く勝手が違うので、出発以前に予想した以上に戸惑うことが多くありました。ACROSS・e-dream-s のツアーは自分たちが企画していることもあり、ある程度予測がつきながら動くことができること、参加者のほとんど（? 全て?）が私より英語ができること、があるのですが、今回は、企画はカナダ側、また一緒に行っているのが「海外初めて」「英語全然ダメ」と言う人たちが半数以上、というツアー。海外ツアー経験が多い、英語の教師、という2つの条件にとりあえず該当する私は、「こんな時どうしたらいいの?」「今の英語訳して!」と常に人から言われる立場に。普段は「英語分からへんし...。教えて。」と開き直って甘えている私もそういう訳にいかず、何とか頑張って英語を聞き取ったり、喋ったりしました。今までに皆さんから受けてきたご忠告やアドバイスを実践しながら、偉そうに人にもアドバイスしたりという場面も!同時に、今までの自分も反省。

現在、@aglance の新着写真は、私の撮ったカナダの写真特集です。続々と登場しますので、お楽しみに!

テクノロジー

塚本 美紀



見てください、この笑顔！先日、環境問題のプロジェクトを共同で行っているミズーリ州のセントチャールズ高校の生徒とテレビ会議をしたときの生徒たちの様子です。時差があるので、日本時間で午前 8 時、ミズーリが午後 6 時、とお互いが少しずつ無理をする時間で行いました。(http://hibiki.fku.ed.jp/mtp/mtp_index.htm)

ヤフメッセンジャーの映像チャットを使って、お互いの顔を見ながら英語でやり取りしました。今回が初めてのテレビ会議だったので、お互いの自己紹介が主な内容でした。生徒は事前に、自分たちの学校が日本のどこにあるのか、学校の中はどんな様子か、などを地図や写真を準備しパワーポイントを使って説明しました。英語でまとまった発表するのは初めてで、いったいどうなることかと少し不安でしたが、セントチャールズの生徒が“I play volleyball. Does anyone play volleyball?”と言うと、生徒の一人がいきなりマイクをつかんで、“I belong to a volleyball team!!”と言ったのには驚きました。普段の英語の授業では、話し始めるまで時間がかかることが多いことを考えると、大きな進歩です。

テクノロジーなんて苦手なので、必要最小限のことをちゃちゃっとやるだけでいいと思っていました。新しい技術を学ぶには時間がかかるし、自分のやりたいことにぴったりあった方法を探すには試行錯誤が必要で、これにもまた時間がかかってしまいます。だからなるべくめんどうなことは避け、必要最小限のことだけをやってきました。けれども、今回の生徒の笑顔は、いつものように「ちゃちゃっと」やっていたのでは、絶対に得られなかったと思います。

このテレビ会議の雰囲気をもつために、我々は教室の片隅にスタジオを準備しました。小さなウェブカメラでは、映像が面白くないので、ビデオカメラを接続し、アングルを変えたり、ズームしたりできるようにしました。カメラも 3 台接続し、生徒やサポートしている教員、パワーポイントの映像などをそれぞれ切り替えられるようにしました。私にはこのようなことは思いつきませんが、技術担当教員がいろいろと試してみても確立したシステムです。またニュース番組のように机を横一列に配置し、その上にマイクを置いたり、



両校のマークを印刷した旗を作ったり置いたりしました。これらの旗は、実習助手がセントチャールズ高校のマークをスキャナに取り込んで印刷したり、ホームセンターで買ってきた木材を切ったりして作った手作りです。このスタジオが、我々の気分を大いに高め、生徒は緊張しながらも、いつも以上の力が出せたと思います。

苦手なことをするのはおっくうで、できない自分を齒がゆく思うことも多く、できれば避けたいと思ってしまいますが、面倒なプロセスを踏むと、これまで経験したことのないことに出会うことができるのだと、生徒の笑顔を見ながら実感しました。

今後はパートナー校のセントチャールズ高校だけではなく、時差のない韓国の学校ともテレビ会議を行っていきたいと思っています。ECAP2004 と 2005 に参加した Lee Young Kap さんの学校とテレビ会議を行うべく、現在、準備を進めています。学校は、クラシカルな定番を提供すると同時に、時代の最先端を感じられる場所であるべきだと思っています。今はまだできないことが多く、技術担当教員に頼りっぱなしですが、このプロジェクトを通じて新しいテクノロジーを身につけ、生徒たちに「最先端」を提供できるよう、私自身の「最先端」を磨いていきたいと思っています。

編集後記

久しぶりに歩いて近所のスーパーに行くと、3件先のお宅の庭先に立派な柿が生っているのを見つけました。毎日、その前を通っていながら、そこに柿の木があることさえ忘れていました。車に乗っているから見えるものもあれば、歩いているからこそ見えるものもありますね。道具を変えることで、今まで見えなかったものが見えてくることもたくさんあるのだらうなあ、とおいしそうに色づいた柿を見ながら思いました。(塚本美紀)